

平安京左京八条一坊一町跡・
御土居跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

国際文化財株式会社

例 言

1. 本書は、京都市下京区観喜寺町地内における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、西日本旅客鉄道株式会社の計画する山陰本線京都・丹波口間の新駅新設工事に伴う埋蔵文化

財発掘調査である。文化財保護法（昭和25年法律第214号）第92条の規定により文文財第356号の受付番号16H065の通知にて実施したものである。

3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、京都市文化財保護課という。）の指導のもとに国際文化財株式会社が実施した。
4. 発掘調査の面積は、376.24㎡である。
5. 発掘調査は、平成28年6月29日～平成28年9月1日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

国際文化財株式会社

統括主任技術者 鬼頭 泰夫

主任調査員 河野 凡洋

主任技術者 鳥海 成年

補 佐 員 長林 大・千喜良 淳

補 助 員 嶋本 広行・内川 博之

整 理 員 千喜良 淳・嶋本 広行

7. 発掘調査は、主任調査員河野、補佐員長林、千喜良、整理作業は、河野、長林、千喜良が担当した。
8. 遺構・遺物の写真撮影は河野、本書の執筆、編集は河野、長林、千喜良が行った。
9. 遺構図に使用した座標、水準測量は、株式会社 プロスベックが行った。
10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

家崎 孝治、馬瀬 智光、奥井 智子、門脇 玄治、川井 健士、谷川 勇貴、辻 康男、山田 功一、山田 邦和、吉川 義彦、若狭 慎二（五十音順）

京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、

（一般財）京都市都市整備公社、西日本旅客鉄道株式会社、大鉄工業株式会社、

パリオ・サーヴェイ株式会社、株式会社プロスベック

凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系に基づいており、方位は座標の真北を北として表記した。
水準点はT.P.値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を40・100・200分の1とした。
4. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を3分の1とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、巻末に註として掲載した。
7. 遺構の分類は、下記の呼称を踏襲した。
掘立柱建物跡、柵列、溝、土坑、柱穴、礎石、堀
8. 遺物は全ての遺物に通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の精細な事項については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所1996、小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究・日本律令的研究・日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀」京都編集工房2005、角田文衛他「第四部平安京の遺物」『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所1994、に従った。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第2章	位置と歴史的環境	7
第3章	遺構	9
第1節	基本層序	9
①・③	ブロック	9
②	ブロック	9
④	ブロック	9
第2節	遺構	10
①・③	ブロック	10
②	ブロック	10
④	ブロック	11
第4章	遺物	18
第1節	遺物の概要	18
①	ブロック出土遺物	18
②	ブロック出土遺物	18
③	ブロック出土遺物	19
④	ブロック出土遺物	19
第5章	総括	21
付編		25
遺物観察表		32

挿図目次

図1	調査地位置図	1
図2	条坊復元図における調査地位置図	2
図3	調査地位置図	3
図4	四行八門と調査地	3
図5	①ブロック作業風景(南から)	5
図6	③ブロック作業風景(北から)	5
図7	②ブロック作業風景(北から)	5
図8	④ブロック作業風景(南から)	5
図9	調査地区配置図	6
図10	周辺調査地位置図	8
図11	①・③ブロック西壁土層断面	12
図12	①・③ブロック平面図	13

図 13	② ブロック北・東・南壁土層断面図	14
図 14	② ブロック平面図	15
図 15	② ブロック溝状遺構1・流路状遺構2土層断面図	15
図 16	④ ブロック北・東壁土層断面図	16
図 17	④ ブロック平面図	17
図 18	④ ブロック北側断割土層断面図	17
図 19	① ブロック出土土器	18
図 20	② ブロック出土土器	19
図 21	③ ブロック出土瓦	19
図 22	④ ブロック出土土器	20
図 23	御土居想定図	23
図 24	2004年・2006年調査との位置関係	24

表目次

表 1	出土遺物概要表	18
表 2	遺物観察表	32

図版目次

図版 1-1	① ブロック南半全景（北から）
図版 1-2	① ブロック北半全景（北から）
図版 2-1	③ ブロック北半全景（北から）
図版 2-2	③ ブロック南半全景（北から）
図版 3-1	① ブロック南壁断割土層断面（西から）
図版 3-2	③ ブロック北壁断割土層断面（南から）
図版 4-1	② ブロック南半完掘状況（北から）
図版 4-2	② ブロック北半完掘状況（北から）
図版 5-1	④ ブロック北半全景（北から）
図版 5-2	④ ブロック南半全景（北から）
図版 6-1	④ ブロック中央北側断割土層断面（西から）
図版 6-2	④ ブロック中央南側断割土層断面（北から）
図版 7	① ブロック近代盛土出土土器（1）
図版 7	④ ブロック攪乱出土土器（10～19）
図版 7	③ ブロック近代盛土出土瓦（9）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査に至る経緯は、京都市下京区観喜寺町地内(図1・2)にて西日本旅客鉄道株式会社(以下、「JR西日本」という)が計画し、大鉄工業株式会社が設計・施工するJR山陰線京都・丹波口間新駅の新設工事が予定されたことが発端となる。計画建物は、梅小路公園内に布設されている京都・丹波口間の高架線路の東西約4700.79mの敷地に建造物を建設するものである。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡(左京八条一坊一町)・御土居跡」に所在する。

平成28年4月に京都市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「京都市文化財保護課」という)

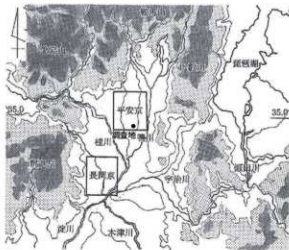


図1 調査地位置図(1:500,000)

は、これらの状況を踏まえて、建造物建設に伴う開発地域の遺構・遺物の有無、残存状況を把握するため、発掘調査の必要性が生じた、これにより建造物を計画するJR西日本と京都市文化財保護課との間において、調査の事前協議がもたれた。その結果、調査範囲は建物計画範囲の内、高架線路の西側、南北長16m、東西幅6.2～6.5mの100.96㎡、その北側、南北長16.7m、東西幅3.8～5.8mの86.7㎡、高架線路の東側、南北長47.8m、東西幅3.5～3.8mの188.58㎡の3ヶ所、計376.24㎡を本調査することとなった。

発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、大鉄工業株式会社より委託を受けた国際文化財株式会社が行った。現地調査期間は平成28年6月29日～平成28年9月1日まで実施した。発掘調査の結果、調査地上層は明治時代以降の開発により攪乱されていた。下層では江戸時代以前の遺構は確認できなかったが、幕末から明治にかけての河川堆積や御土居堀跡の堆積が確認できた。

第2節 調査の経過

今回の調査の体制と方法を定めるために、周辺の調査によって得られた遺構・遺物の成果や今日までの研究について精査し、検証を行った。

周辺の発掘調査としては、南側に隣接して2004年に京都市埋蔵文化財研究所によって行われたJR山陰線の複線化工事に伴う発掘調査、西側に隣接して2006年に京都市埋蔵文化財研究所によって行われたJR山陰線の複線化工事に伴う立会調査が挙げられる。2004年の調査においては45度の法面をつけての調査であり、最深部での調査面の幅は狭いものであったが、土層から御土居堀跡の西肩に近い部分の確認されている。また2006年の立会調査では、東肩裾部が確認されている。

これらの周辺の発掘調査成果から、当該地は御土居堀跡の一部に当たるため、これらに類する成果が得

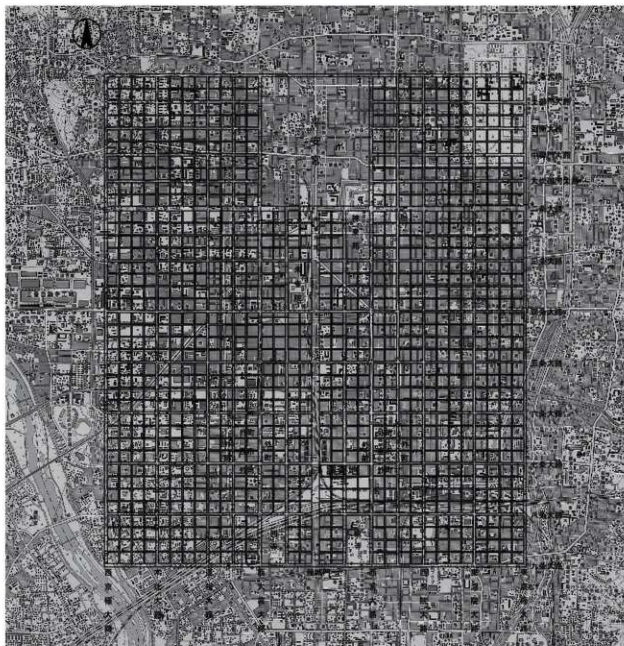


図2 桑坊復元図における調査地位置図(1:40,000)

られるものと考えられた。2004年の調査では、地山面までは確認されていないが、2006年度の立会調査では地山面が確認されており、当該地での掘削深度によっては、御土居堀跡の一部分であっても地山面まで確認でき、また、それ以前の遺構の有無を確認できることが予想された。

調査体制としては、主任調査員1名、補佐員2名、調査補助員2名の配置を行った。また、市文化財保護課の指導により、学術研究に基づいた調査を行うため、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部博士（文化史学）山田邦和教授に委員を依頼した。

高架線路の橋脚西側を①・③ブロック、東側の南を②ブロック、北側を④ブロックとし、調査地の地区割りに関しては、世界測地系の座標に基づいた4mの方眼による地区割付（図3）を北側と南側にそれぞれ設定した。地区名については、④ブロックは北西角を基点とした東西方向をアルファベットによるA区からC区、南北方向を数字による1区から5区の地区名として設定し、①・③、②ブロックは

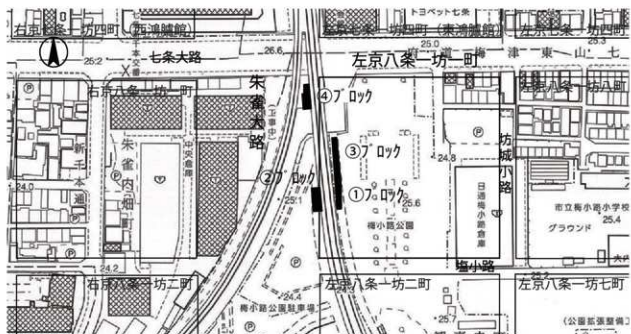


図3 調査地位置図 (1:2500)

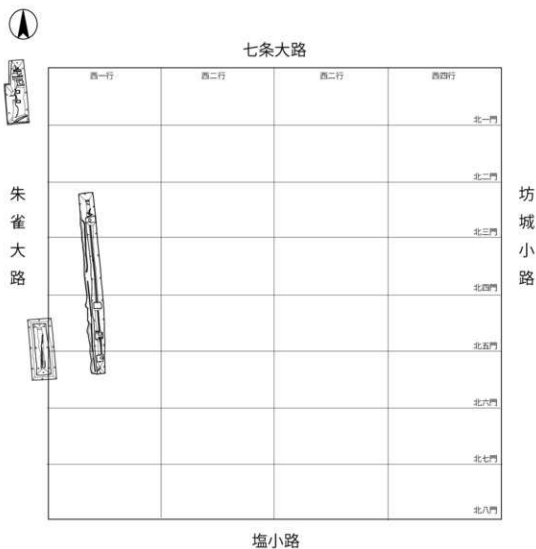


図4 四行八門と調査地 (1:1000)

北西角を基点とした東西方向を数字によるA区からG区、南北方向をアルファベットによる1区から14区の地区名として設定した。また、高架線路の橋脚傍という立地条件から45度の法面をつけての調査となった。

基準点は②ブロック (TA-1-1 X=112128.760 Y=23455.258 H=26.494)、④ブロック (TA-1-2 X=112194.300 Y=23451.691 H=25.134) ①ブロック (TA-2-1 X=112199.468 Y=23436.288 H=25.087)、③ブロック (TA-2-2 X=112167.390 Y=23439.079 H=25.453) を設置した。

平成28年6月29日より、既存のフェンス、アスファルトの撤去及び、仮囲いの設置を行い、平成28年7月5日までに現場事務所、トイレ、機材庫等の設置、調査道具類の搬入等を行った。橋脚の養生、敷鉄板により排土置場の設定を行った。排土置場が狭少なため各ブロックは北側と南側に反転掘りによる発掘調査となった。

平成28年7月6日にJR西日本、京都市都市整備公社、京都市文化財保護課、大鉄工業株式会社の立会のもと②ブロック及び④ブロックのLED管や雨水管などの埋設物の確認作業を行った。その結果、④ブロックでは埋設物を確認した。検出した埋設物は現在使用されているため、土壌などで養生をし、残しての掘削となった。

平成28年7月7日に④ブロック北側から調査を開始した。アスファルト面から-0.95mまで碎石、近代の盛土が堆積し、それ以下は砂層と砂礫層が堆積していた。砂層は近代以降に大きく攪乱されていた。記録の後、北壁及び北側の南端中央部を断割りを行った結果、地山面の黄褐色粘質土を確認し、また、東側への落込みを検出した。

平成28年7月14日にJR西日本、京都市都市整備公社、京都市文化財保護課、大鉄工業株式会社の立会のもと①・③ブロックの埋設物の確認作業を行った。

平成28年7月20日に④ブロック南側の調査を開始した。北側と同様な堆積状況が続き、また、同じく近代以降に大きく攪乱されていた。記録の後、北端中央部分を断割りし、地山面の黄褐色粘質土を確認し、東側への落込みを検出した。なお、④ブロックについては砂礫層の堆積が厚く、振動による崩落の危険性、があったため、砂礫層より下層調査は安全面を考慮して、断割り部分を3ヶ所設定して下層確認調査を行った。

平成28年7月21日に①ブロック南側の調査を開始した。調査区西側では現地表面より-0.2mでLED管、東側では現地表面より-1.1mで雨水管を検出した。いずれも現在使用されているため、現状維持のままの調査となった。また、いずれの埋設物は調査区を南北に縦断しているため、下層の調査が行えなかったため、埋設物が途切れる部分を断割りし下層確認を行うこととなった。記録の後、南壁付近を断割り下層の確認を行ったが、現地表面より-2.3m程で、近代の陶管を検出したため、掘削が困難となり終了した。

平成28年7月25日に③ブロック北側の調査を開始した。①ブロック南側で検出した雨水管は③ブロックにおいても調査区内を縦断していたが、北壁手前で東へ屈曲するため、北壁付近を断割りし、下層確認を行った。現地表面より-2.2mまで近代の盛土が堆積し、それ以下に御土居堀跡の埋土と考えられる粘質土と砂の互層堆積を確認した。しかし、盛土が脆弱なため、崩落の危険性から安全面を考慮-2.5mまで掘削したところで調査を終了した。

平成28年7月27日に③ブロック南側の調査を開始した。北側と同様に掘削可能範囲の中央部分で雨水管が南北に縦断するため下層の調査は行えなかった。

平成28年7月29日に①ブロック北側の調査を開始した。③ブロック南側と同様に雨水管が南北に

縦断するため下層の調査は行えなかった。

平成 28 年 8 月 2 日に②ブロック南側の調査を開始した。この調査区では埋設物が存在しないため、全面的に調査が可能となった。しかし、④ブロックと同じく砂層の堆積が厚く崩落の危険性があるため、安全面を考慮し、碎石を掘削後、各辺から 0.5m の幅を取って砂層を掘削することとなった。砂層は約 1.2m 堆積し、砂層直下より近代の溝状遺構を 2 条検出した。掘削、記録の後に南壁を断削し下層の確認、また、南壁の東西をやや拡げて掘削し堆積状況の確認を行った。その結果、西側の拡張で溝状遺構は 1 条となり、もう 1 条は西側に落ち込む流路状のものである事が確認できた。東側の拡張では東側に落ち込む土層を確認したため、既往の調査も踏まえ御土居堀跡が最終的に埋没した時期の埋土と判断した。

平成 28 年 8 月 11 から 17 日までお盆休み。

平成 28 年 8 月 19 日に②ブロック北側の調査を開始した。砂層を掘削後、南側で検出した溝状遺構と、流路状遺構の続きを検出した。掘削、記録の後、中央部分の東側を拡張し、南壁で確認した東側への落ち込みの確認をした。また、北壁を断削し、下層の確認と、東西を拡げての堆積状況の確認をした。その結果、流路状の遺構は調査区の西側で底部が現れ、さらに西側へ続く、東側の落ち込みを切っていることが確認できた。

平成 28 年 8 月 25 日に撤収作業を行い、8 月 26 日より並行してフェンス、アスファルトの現状復旧作業を開始した。

平成 28 年 9 月 1 日に JR 西日本、京都市都市整備公社、大鉄工業株式会社の確認検査を受け引き渡しを行い調査を終了した。



図 5 ①ブロック作業風景 (南から)



図 6 ③ブロック作業風景 (北から)



図 7 ②ブロック作業風景 (北から)



図 8 ④ブロック作業風景 (南から)

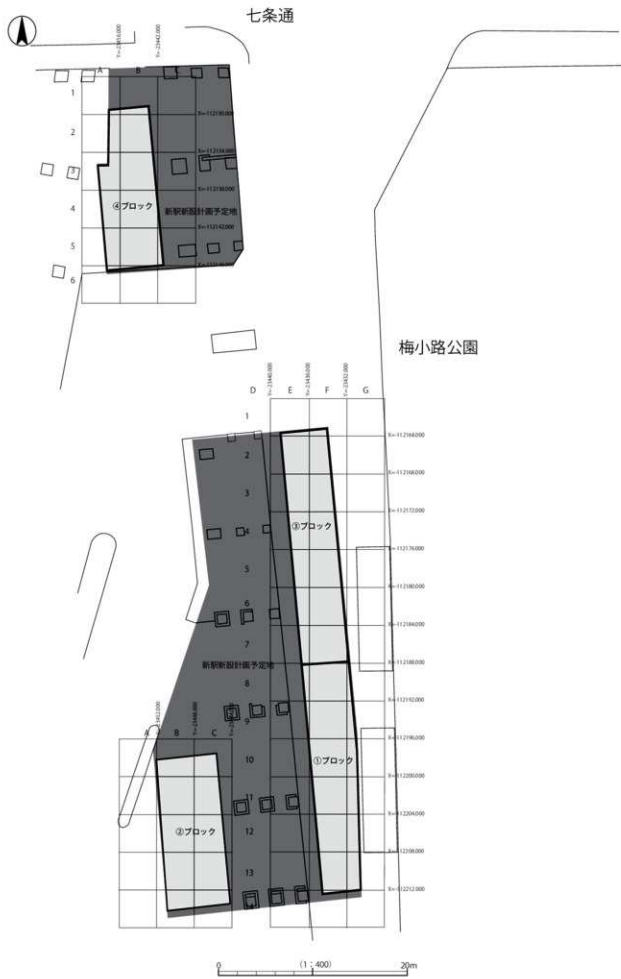


図9 調査地区配置図 (1:400)

第2章 位置と歴史的環境

当調査地は京都盆地の中央に位置し、現在の行政区分では京都市下京区観喜寺町に属する。現在の梅小路公園西側に施設されている西日本旅客鉄道の山陰本線京都・丹波口間の高架下に位置し、七条通の南側に面する。

平安京条坊復元図^(註9)にあつては、左京八条一坊一町に位置し、東西は西一行、南北は北三門から北六門と朱雀大路に位置している。『拾芥抄』の「東京図」では当町は無記名になっており邸宅などはなかったものとみられる。

同じ八条一坊内には平安時代末期には平氏一門の邸宅であった西八条第が三～六町、十一～十四町と南側八町分を占めて営まれていた。北側の左京七条一坊三・四町には東瀨陽館が設置され、同十三・十四町には東市の外町が設置されていた^(註2)。

応仁の乱以後は平安京城が上京と下京に再編されたが、下京は五条大路以北であったため、左京六条以南は廃れていったものとみられる。天正年間に豊臣秀吉による地割により町は再び整備され、御土居や御土居堀が造られる中で、当町に相当する地域も御土居内に入る事となる。

御土居や御土居堀と呼ばれているものは、豊臣秀吉が東辺は鴨川、西辺は紙屋川、南辺は九条、北辺は鷹峯とする総延長約22.5kmの土塁と堀からなり、当時、上京と下京に中心が移っていた京都の全域（現在の北区、上京区、中京区、下京区辺り）を囲っていた施設である。京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査の成果^(註3)から土塁は基底部幅約20m、残存の高さ約2m、堀は幅12.5～20m、深さ1.5～2.5mの規模であった事が判明してきている。天正十九（1591）年閏正月から普請が始まり、大規模普請であったにも関わらず、5ヶ月後には大方完成していたようである^(註4)。

当地の北側には御土居から各地へ延びる街道の終発点の1つである丹波口があるが、完成当時、当調査地を含む一帯がどのような状態であったかは不明である。しかし、少なくとも寛文九（1669）年頃には、堀は畠地や沼となっていたようである^(註5)。その後も、江戸時代の『洛中絵図』などからでも一帯は畠地であったとことが読み取れる。

明治時代に入った後も畠地であったことが地形図などで確認できるため、江戸時代を通じて畠地であったことが分かる。そして、明治30（1897）年頃に鉄道が施設されて以降、機関庫や梅小路公園の一部となった。

左京八条一坊一町内での周辺の調査としては、山陰線の高架複線化工事に伴って2004年に当調査地南側において発掘調査、2006年に東側において立会調査が京都市埋蔵文化財研究所により実施されている^(註6)。どの調査においても平安京跡に関わる遺構は検出されておらず、2004年の発掘調査では御土居跡の西肩に近い部分を検出し、2006年の立会調査C地点では御土居跡の東肩を検出したことが成果として挙げられている。2004年の発掘調査では御土居の最終埋没時期の様相を示している可能性があるとされており、明治30年頃の山陰本線の施設の時期までの堆積土層であると示されている。

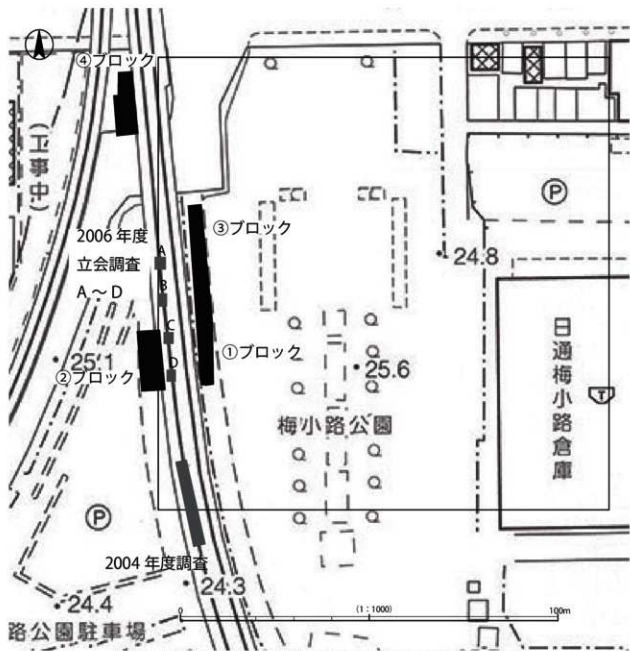


図10 周辺調査地位位置図（京都市基本図1：2500「島原」に加筆）

〈参考文献〉

- 註1) 辻純一「染物制とその復元」財団法人 古代学協会・古代学研究所編『平安京復原』角川書店1994年
- 註2) 山田邦和「左京全町の概観」財団法人 古代学協会・古代学研究所編『平安京復原』角川書店1994年
- 註3) 小橋山一良「第218回京都市考古資料館文化財講座 御土居 一初めて造られた城塞～」財団法人 京都市埋蔵文化財研究所2010年
南 孝雄「第257回 京都市考古資料館文化財講座 御土居の究極—近年の発掘調査成果から—」財団法人 京都市埋蔵文化財研究所2014年
- 註4) 京都市「京都の歴史4 桃山の開花」学芸書林1970年
- 註5) 中村武生「御土居堀ものがたり」京都新聞出版センター2005年
- 註6) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡・御土居跡』2007年

第3章 遺構

第1節 基本層序

本調査において確認された堆積土はそのほとんどが近・現代に堆積した盛土層であり、近世以前に堆積したと考えられる堆積土は確認されていない。また、本調査はそれぞれの調査地が隣接しておらず土層の堆積状況が異なるため、それぞれの調査ブロックごとに各層の相層、性格についての特徴を記述する。

①・③ブロック (図11)

1～3層は現代の盛土層である。4層 10YR5/4 黄褐色粗砂は雨水管掘方の堆積土である。5～8層は明治時代以降の遺物がまぎらわしく出土しており、遺物の出土状況から明治以降の盛土と考えられる。9層は陶管の掘方である。③ブロック北端部の断割において地表より約-2.7m 下層において確認された10層は、2.5Y4/1 黄灰色粘質土と黄褐色粗砂が互層状に堆積しており、堆積状況と①・③ブロックの調査地が御土居堀跡の推定位置に位置することから、御土居堀跡の堆積と考えられる。

②ブロック (図13)

1層の碎石は上部に施工されたアスファルトの客土である。2層と3層の 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂は、調査区全体に約0.8～1.4mの層厚で堆積しており、堆積状況から④ブロックの4～6層と同様に河川の氾濫に由来する堆積と考えられる。4層 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂は明治以降の盛土の堆積である。5層の 5Y5/2 灰オリーブ色シルトは溝状遺構1の堆積、6・7層は流路状遺構2の堆積である。なお、この5層上面が本調査における遺構検出面である。8層 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂、9層 5Y4/1 灰粘質土、10層 2.5Y4/1 黄灰色粘質土は調査区北・南の両端部と中央部の断割においてのみ確認された堆積であり、堆積が西側から東側に傾斜していたため、2004年度発掘調査の成果からも御土居堀跡の西側肩部分の堆積であると考えられる。11層 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂は溝状遺構1、流路状遺構2、御土居堀跡に大きく削平されていることから不明な点も多いが、径1～5cm程の礫を多量に含み、調査地の約1/2の範囲に堆積することから流水による堆積の可能性が考えられる。12～15層は地山の堆積である。

④ブロック (図16)

1層の碎石は上部に施工されたアスファルトの客土である。2層 10YR3/1 黒褐色細砂、3層 10YR4/1 褐灰色粘質土は近・現代の盛土層である。4層 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂と③ブロック北東端部の断割において確認した5層 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂、6層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土は、調査区全体に約0.6～0.7mの層厚で堆積しており、その堆積状況から②ブロックの2・3層と同様に河川の氾濫に由来する堆積と考えられる。7層は地山の堆積である。

第2節 遺構

本調査では、①～④ブロックの調査地の調査を行っているが、いずれのブロックも安全面の考慮から45度の法面をつけて掘削を行っているため、実際の調査面積よりも非常に狭い範囲の調査となっている。特に①・③ブロックにおいては西側で南北に縦断するLED管、中央部分では現地表面より-0.9m下層において南北に縦断する雨水管を検出したため、それより下層の調査は行えなかった。そのため、①ブロックの南端部、③ブロックの北端部の断割りによる下層確認調査を行っている。以下にそれぞれのブロックにおいて検出した遺構について記述する。

①・③ブロック (図12 図版1・2・3)

前述したように、①・③ブロックにおいては、既存のLED管と雨水管により現地表面より-0.9mより下層の調査は行っていない。そのため、①ブロック南端部、③ブロック北端部で断割りによる下層確認調査を行っている。

①ブロック確認調査(図12)①ブロック南端部では、現地表から約-2.2m下層において南北方向に延びる陶管を検出した。掘方と考えられる9層より明治時代とそれ以降の遺物が出土したことから、明治時代以降に埋設された陶管である。

③ブロック確認調査(図12)③ブロック北端部では、現地表より約-2.7m下層において2.5Y4/1黄灰色粘質と黄褐色粗砂層が互層状に堆積する10層を検出する。検出範囲が0.5m四方と非常に狭く、遺物も出土していないことから不明な点も多いが、堆積状況と①・③ブロックが御土居堀跡の推定位置に位置することから、御土居の堀跡の堆積と考えられる。

②ブロック (図14 図版4・5)

②ブロックでは現地表面より-1.9m下層の4層直下にて溝状遺構1条、流路状遺構1条、また、調査終了後に北側端部と南側端部、中央部分で行った断割りによる確認調査では、御土居堀跡と考えられる堆積を北壁面と南壁面、東壁面で確認した。

溝状遺構1(図14・15) ②ブロック中央部で検出した南西から北東に延びる溝状遺構である。南西側と北東側は調査地外へ伸びている。平面形状は直線状を呈し、断面形状は皿状を呈する。検出長は8.7m、検出幅0.8m、深さ-0.22mを測る。埋土は2.5Y2/1黒色粘質土の単一層である。遺物は18世紀後半の肥前系の染付の角鉢(図20-2)、明治期の瀬戸美濃系の染付の蓋(図20-3)が出土しており、溝状遺構1は明治時代以降に埋没したものと考えられる。

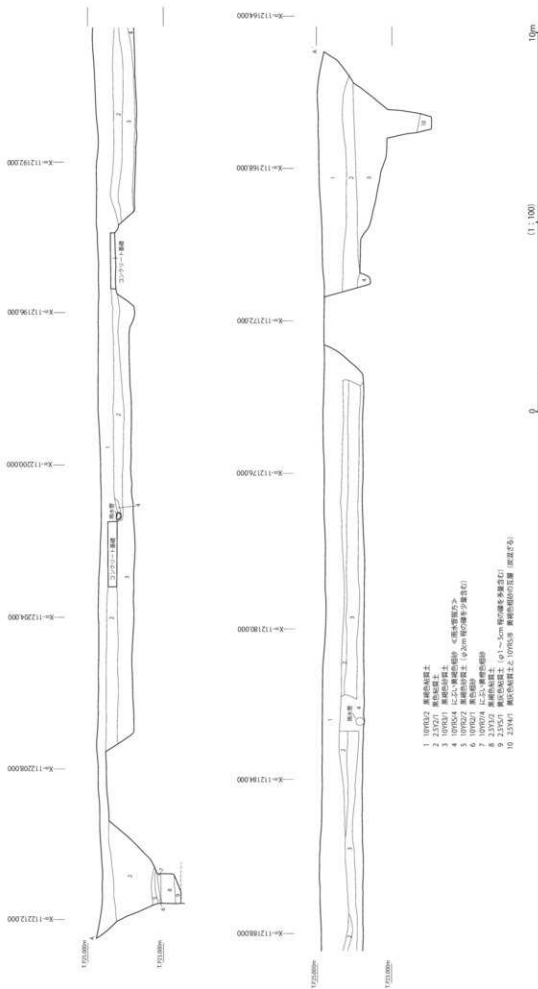
流路状遺構2(図14・15) ②ブロック中央部で検出した。東側は溝状遺構1に削平され、北側、南側、西側は調査区外へ伸びるため形状は不明であるが、北壁面と南壁面で確認した堆積状況から南北方向に延びる流路状遺構であると考えられる。平面形状及び断面形状は不明である。検出長は10.1m、検出幅1.1m、深さ-0.26～-0.33mを測る。埋土は5Y5/2灰オリーブシルトの単一層である。遺物は明治期の瀬戸美濃系の染付碗(図20-7)と染付蓋(図20-8)が出土しており、流路状遺構2は明治時代以降に埋没したものと考えられる。

御土居堀跡（図14） 調査終了後の確認調査において②ブロックの北壁面と南壁面の東側と東壁面中央部において確認した遺構である。北側、南側、東側は調査区外へ伸びるため平面及び断面形状は不明であるが、壁面の堆積状況から、検出長15m、検出幅0.65m、深さは0.55mのみ確認している。埋土は8層10YR5/4にぶい黄褐色細砂、9層5Y4/1灰色粘質土、10層2.5Y4/1黄灰色粘質土の3層を確認する。また、各層の堆積は西側から東側に傾斜し、検出位置と2004年度発掘調査の成果、また御土居堀跡の西側肩部分の推定位置に近いことから、御土居堀跡の西肩部分であると考えられる。遺物は9層の底面より明治期の肥前系の染付椀（図20-4）、瀬戸美濃系の染付碗（図20-5）染付蓋（図20-6）が出土しており、堀跡は明治時代以降に埋没したものと考えられる。

④ブロック（図17 図版6）

④ブロックは4層10YR5/4にぶい黄褐色細砂の上面において遺構の検出を行っているが、明治時代以降の損乱のみで近世以前の遺構は検出されなかった。そのため、②ブロックの北東端部を1ヶ所、中央部を2ヶ所、断割による確認調査範囲を設定し、下層確認調査を行っている。その結果、流路状遺構1を検出した。

流路状遺構1（図17・18） 3ヶ所の確認調査においては、それぞれ現地表面から約-1.95～-2.06m掘削し、地山層を検出している。この地山直上において全てのトレンチにおいて西側から東側へ傾斜する落込みを検出した。これらの落込みは全て南北方向に延びており上端が一直線上に並ぶことから同一の落込みであることを確認する。検出長は9.2mを測り、部分的な検出のため、検出幅0.1m、深さは0.1mのみ確認している。また、形状等も不明であるが、検出状況から流路状遺構の西肩であると考えられる。遺物は出土しておらず、遺構内に上層の河川の氾濫と考えられる4～6層が厚く堆積することから、流路状遺構1は明治時代以降の河川の氾濫に伴い埋没したものと考えられる。





—X=21410.000

—Y=21410.000

—X=21410.000

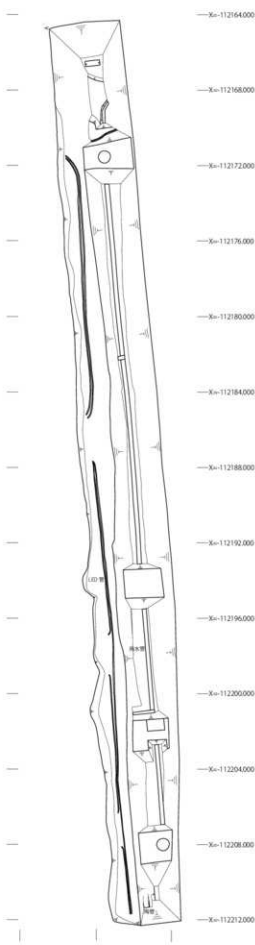


図 12 ①・③ブロック平面図 (1:200)



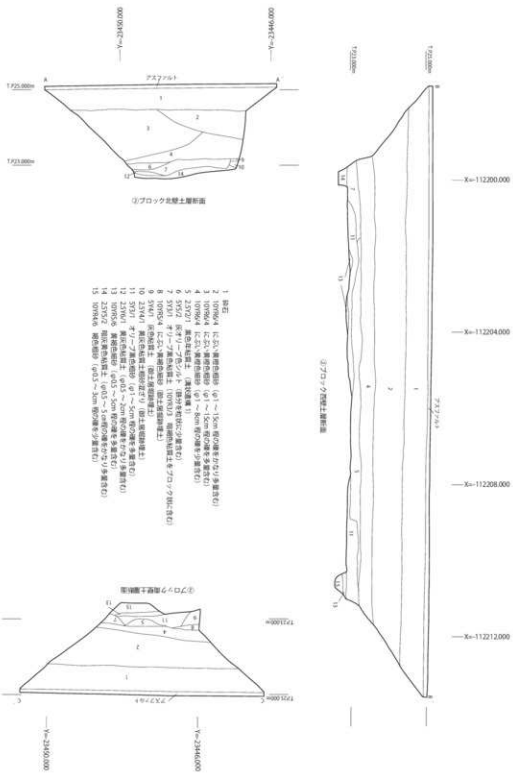


図 13 ②アズロック北・東・南壁土層断面図 (1 : 100)

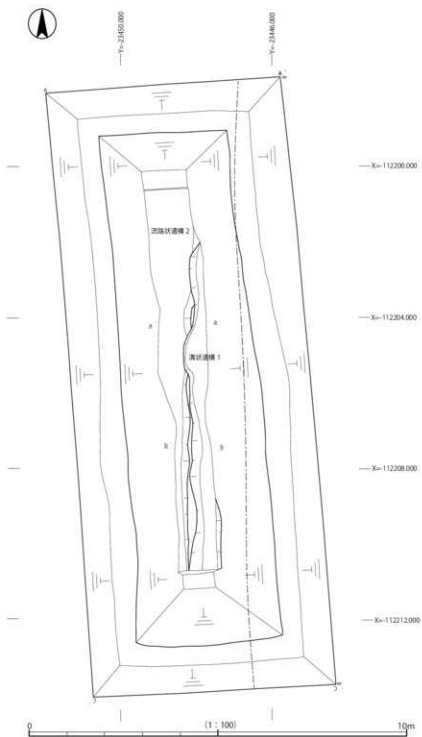


図 14 ②ブロック平面図 (1:100)

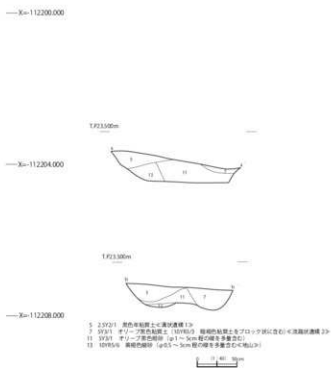


図 15 溝状遺構 1・流路状遺構 2
土層断面図 (1:40)



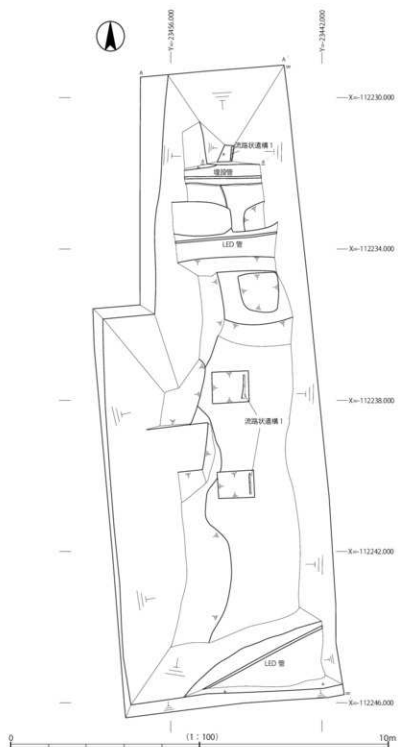


図 17 ④ブロック平面図 (1:100)



図 18 ④ブロック北側断面土層断面図 (1:40)

- 2 10YR3/1 黄緑色磁砂
- 4 10YR5/4 IC-DL-黄緑色磁砂
- 5 10YR5/3 IC-DL-黄緑色磁砂 (1~5cm程の層を多量含む)
- 6 10YR5/4 IC-DL-黄緑色粘質土
- 7 10YR5/4 IC-DL-黄緑色磁砂

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回出土した遺物はコンテナパッドに7箱で、国産陶磁器を中心に土師質土器、焼締陶器、瓦器、瓦が出土している。遺物の時期は鎌倉時代から近・現代に至るまで存在し、なかでも明治期の陶磁器が大半を占める。これは今回の調査地が旧国鉄梅小路機関区跡に所在することと関係あろう。また、今回の調査の目的である御土居跡の堀の痕跡がいつまで残存していたかを検証する上で明治期の遺物がまとまって出土したこともおおいに関係が考えられる。また、それに混ざり江戸時代の肥前系の染付けや瓦、中世の瓦器、常滑焼などが出土していることも特筆されよう。

遺物の時期は凡例に掲げた文献及び、註7)～註9)の文献を参照した。

表1 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
中世	瓦器、焼締陶器		常滑焼1点		
近世	土師質土器、陶器、磁器、瓦		土師質土器5点、陶器3点、磁器3点、軒丸瓦1点		
近代	陶器、磁器		陶器2点、磁器6点		
合計		7箱	21点(1箱)	1箱	5箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後A・Bランク遺物を抽出したため出土時より2箱多くなっている。

第2節 各地区出土遺物

①ブロック出土遺物

近代盛土出土土器(図19 図版7)1は常滑焼の甕の底部である。内面に回転ナデを施し、外面には離れ砂が残る。破片のため時期は不明であるが中世であろう。

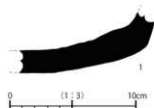


図19 ①ブロック出土土器
(1:3)

②ブロック出土遺物

溝状遺構1出土土器(図20 図版7)2は肥前系の染付の角鉢である。内外面に呉須による模様を描かれる。模様の特徴からみて18世紀後半代と思われる。なおこの鉢には底部付近に焼継痕が看取される。3は瀬戸美濃系の染付の蓋であろう。外面には雲文が呉須によって描かれる。文様の特徴からみて明治期のものであろう。

御土居堀跡出土土器(図20 図版7)4は肥前系の染付碗である。外面に紙刷印判による模様が描かれている。5は瀬戸美濃系の染付碗である。外面に雲文が描かれる。形態的特徴からみて明治期のもの

であろう。6は瀬戸美濃系の染付蓋である。内外面に呉須で模様が描かれる。模様の特徴からみて明治期のものであろう。落込みは御土居の西肩とみられ、4が紙刷印判であることから明治初期以降に埋没した可能性を指摘できよう。

流路状遺構2出土土器(図20 図版7) 7・8は瀬戸美濃系の染付碗である。7は外面に菱文が描かれ、底部外面には判読不明の銘が書かれている。文様の特徴から見て明治期のものであろう。8は外面には線文を描く。底部外面には判読不明の銘が書かれている。文様の特徴からみて明治期のものであろう。



図20 ②ブロック出土土器 (1:3)

③ブロック出土遺物

近代盛土出土瓦(図21 図版7) 9は軒丸瓦である。瓦当面と体部は欠損する。外面はナデを施し、内面には布目痕が看取される。

④ブロック出土遺物

近代盛土出土遺物(図22 図版7) 10は丹波焼の通い徳利の底部である。外面には施軸しイッチン描きによる屋号の一部が残る。内面は回転ナデを施す。形態的特徴からみて幕末～明治期の可能性がある。11は信楽焼の汽車土瓶の体部である。外面に施軸し、内面は回転ナデを施す。形態的特徴からみて明治期のものであろう。

攪乱出土遺物(図22 図版7) 12～14は口縁部が二次焼成を受けていることから土師質土器の火鉢と考えられる。12は外面にヘラミガキを施し、沈線を一途巡らす。口縁部は折り返をしている。内面にはナデを施す。外面には煤が付着する。13は口縁部が肥厚し体部に断面三角の罫を巡らす。また、口縁部直下には透かし穴をもつ。全体的に煤が付着する。14は口縁部が肥厚し、大きく罫が張る。また、断面三角の罫を巡らす。内外面に煤が付着する。15、16は植木鉢の可能性はある。15は外面にヘラミガキを施す。内面にはヘラケズリを施している。16は短く立ち上がる口縁部を持つ。外面にはヘラミガキを施す。内面には回転ナデを、底部外面には回転ヘラ削りを施す。12～16はそれぞれの形態的特徴からみて幕末～明治期の可能性が高いと思われる。17は汽車土瓶である。外面に施軸するが底部は露胎である。内面は回転ナデを施す。なお、外面には「綾」と墨書されることから現在の山陰線の綾部駅の土瓶の可能性を指摘しておきたい。形態的特徴からみて明治期のも

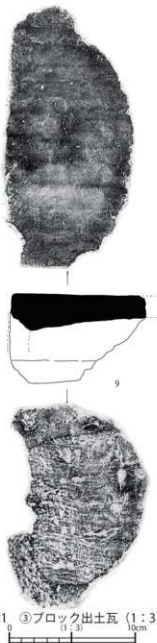


図21 ③ブロック出土瓦 (1:3)

のであろう。18は丹波焼の通い徳利の底部である。外面には施釉される。内面は回転ナデを施す。形態的特徴からみて幕末～明治期の可能性が高い。19は丹波焼の通い徳利の底部である。外面に施釉し、内面には回転ナデを施す。外面にはイッチン描きによる屋号の一部が看取される。形態的特徴から幕末～明治期のものと推察される。20は肥前系の染付碗である。外面には梅文とおもわれる文様が描かれる。底部外面には判読不明の銘がかかっている。形態的特徴からみて18世紀前半代の可能性が考えられる。21は肥前系のいわゆる「くらわんか手」の碗の体部である。外面に呉須で文様が描かれる。文様からみて18世紀前半代の可能性がある。

〈参考文献〉

- 註7) 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年
 註8) 『平安京左京北辺四坊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
 註9) 畑中英二編『信楽焼の汽車土甎の研究』サンライズ出版 2007年

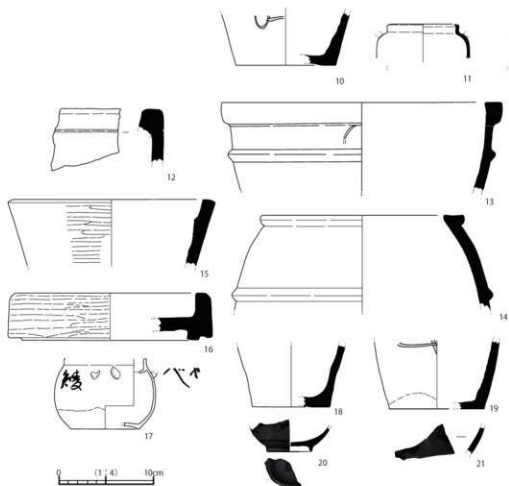


図22 ④ブロック出土器 (1:4)

第5章 総括

今回、発掘調査を実施した京都市下京区親喜寺町は平安京八条一坊に相当し、調査地は左京八条一坊一町の西側と朱雀大路に位置している。同町内では公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所により2004年に発掘調査、2006年に立会調査^(註10)が実施されている。2004年の発掘調査では近世以前の遺構は検出されておらず、2006年度の立会調査においても近世以前の包含層は確認されていない。しかし、2004年発掘調査では御土居堀跡の西肩堀付近を、2006年立会調査のC地点では東肩が検出されている。

そこで、2004年発掘調査の北側で2006年立会調査の西側に位置する②ブロックと、2004年発掘調査の東側に位置する①・③ブロックから御土居堀跡に関連する遺構が確認できる可能性があり、また、近世以前の遺構の有無を確認することを目的として調査を行った。④ブロックに関しては朱雀大路上に位置するため、それに関連した遺構の確認を目的として調査を開始した。

しかしながら、①・③、④ブロックには多数の既存の埋設物が調査区内を縦断もしくは横断しており、それらを残す必要があった。また、近代以降の盛土は脆く崩落の危険性があり45度の法面を付けての調査であったため、全体的に調査することができず、部分的に断割をして下層を確認する調査となった。

②ブロックは橋脚に近接し、砕石下層の砂礫層が厚く堆積していたため、砕石掘削後、砂礫層検出面で各辺から0.5mの幅を設けそこから45度の法面を付け、安全性を確保しての掘削となった。しかし、既存の埋設物は無かったため、最終調査面は狭くなったが、全体的に調査を実施することが可能であった。各ブロックと排土置場の容積により反転しての調査となった。以下、各ブロックについて記す。

①・③ブロック この調査区は高架東側に位置する南北に長い調査区である。調査工程の条件で南側を①ブロック、北側を③ブロックとして調査を行った。調査区内のほぼ中央に雨水管、西側にLEDケーブルが縦断し、部分的に東西に雨水管、LEDケーブルが横断していた。そのため、全体的に掘削し調査することは困難であるとの判断から雨水管が検出されなくなる北壁、南壁付近を掘り下げて調査を行った。南壁側は①ブロックに該当するため先に掘り下げた。近代以降の盛土の堆積は厚く、T.P.23m付近で粘質土に変わったため、御土居堀跡の埋土と考え、更に下層の掘削を進めたが、粘質土検出面から50cm程で近代の陶管を検出したため、これ以降の掘り下げは困難であった。以上の状況から南壁付近では掘削可能な深度まで近代以降の盛土が堆積しており、御土居堀跡の埋土の確認はできなかった。

③ブロック北壁側でも近代以降の盛土の堆積は厚かったが、T.P.22.4m程で①ブロック南壁側で確認した粘質土とは異なる粘質土と砂礫の互層状の堆積を確認することができた。しかし、土層は水平堆積に近く東側への立ち上がりもなかったため、御土居堀跡の埋土の可能性はあるが、図23による御土居及び堀の想定位置から堀の部分としては中央に近い場所ではないかと判断した。

②ブロック この調査区は高架西側に位置し、2004年発掘調査の北側、2006年立会調査の西側に位置している。砕石、砂礫層を掘削後、近代の溝状遺構1、西側に落ち込む流路状遺構2を検出した。いずれも明治以降の遺物が出土しており、新しい遺構であった。上述したように最終調査面の幅が狭かったため、調査終了後、南壁、北壁下層の確認と50cm幅で設けた部分を東西共に端まで掘削し、土層を確認した。調査区中央部分で東側を端まで掘削し土層を確認した。調査区東側の各部分で東側に落ち込む砂層、粘質土層を確認し、出土した遺物は明治時代初期の頃までの物であった。これらの土層は2006年度発掘調査の成果を踏まえ、御土居堀跡の西肩の上面の埋土であろうと判断した。

図 24 での御土居堀の西端からやや離れ堀幅が 20m 以上になる。中村武生氏による御土居及び御土居堀の研究^(註 12)の中で、寛文九年のこの付近の絵図について言及されており、その絵図は土塁と堀の規格、当時の堀の状況が分かるものであると記されている。堀は幅 17m であるが、所々沼や島となっていることが分かる。堀としての機能は薄らいでいたようではあるが、水がある以上洪水などの災害により浸食されていった可能性が考えられる。

西側へ落ち込む流路状遺構 2 は北壁の土層から御土居堀を切っており、砂層と粘質土からなっていた。上部は近代以降に堆積した砂礫層によって切られており、底部付近を検出したものと考えられる。

④ブロック この調査区は高架西側に位置し、②ブロックの北側に位置している。調査区内の北側と南側に LED ケーブルが横断しており、北側には不明管が横断していた。そのため、①・③ブロック同様に全面的な調査ができず、最終的には部分的に掘り下げた調査となった。砕石掘削後、砂礫層となり、その面では近代以降に大きく攪乱されていた。当初は、砂礫層が地山面ではないかと考えられたが、攪乱掘削後の断割でさらに砂層が確認できたため、さらに掘り下げ、本来の地山面まで到達した。地山面は粘質土層で、東側に落ち込んでおり、直上まで砂層が堆積していた。その状況は北壁、調査区中央部分の北側、南側で共通してみられたため、調査区内を縦断する自然流路が存在していたと推察できる。一般的に見られる流路の堆積状況ではなく、流路自体が全体的に覆われていたため、直上の砂層や砂礫層は流路の氾濫もしくは洪水などの災害により堆積したものである可能性が考えられる。

各ブロックの個々の状況はこの様であった。全体的には④ブロックの東への落込みと②ブロックの西への落込みが 1 つの流路を形成し、②ブロックの西への落込みと京都市埋蔵文化財研究所 2004 年調査の西屑堀が御土居堀跡の西側となり、①・③ブロックは御土居堀中央部分に相当するものと考えられる。これは、図 24 の中村氏の御土居・堀の位置想定図と各調査地の位置を照らし合わせたものから推察できる。今回の調査では土質や埋設物の関係から全面的な調査を実施することができず部分的な成果しか得られなかった。しかし、御土居堀跡の西屑とみられる落込みを検出できた。また、京都市埋蔵文化財研究所 2004 年調査で言及されている御土居堀跡の最終埋没年代と近似した遺物が出土したことで、明治までは御土居堀の痕跡は残っていたことが確認できたことが成果である。

〈参考文献〉

註 10) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所「平安京跡・御土居跡」2007 年

註 11) 小嶋山一良「第 218 回京都市考古資料館文化財講座 御土居 一初めて造られた城郭—」財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2010 年

南 孝雄「第 257 回 京都市考古資料館文化財講座 御土居の実像—近年の発掘調査成果から—」財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2014 年

註 12) 中村武生「御土居堀ものがたり」京都新聞出版センター 2005 年

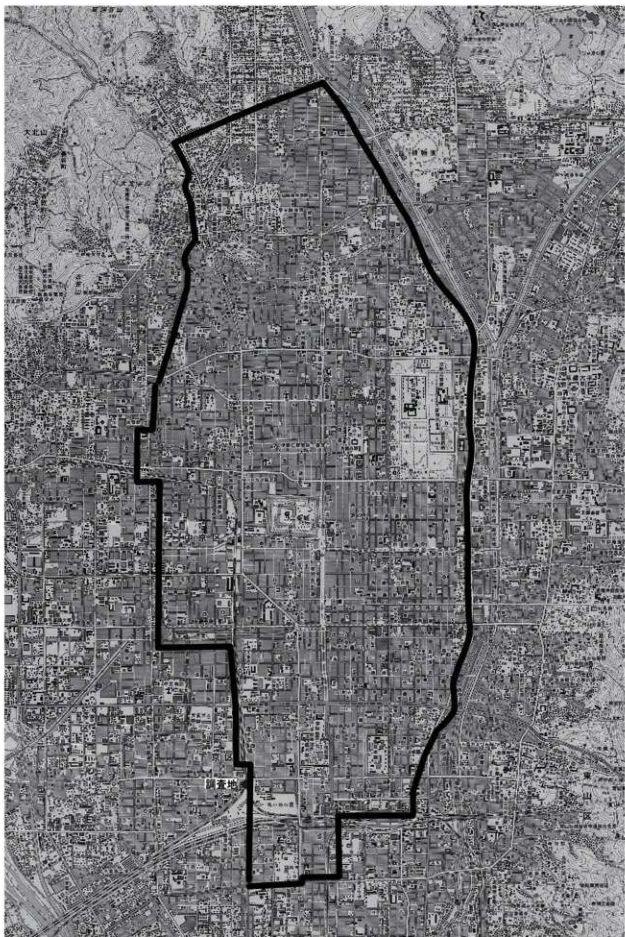


図 23 御土居想定図 (1:40,000) 註 11) を参照

付編

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、②ブロック壁面で採取した御土居堀跡の埋土の9層と10層について珪藻分析を行う、堀跡内の堆積状況などの検討を行う。

1. 試料

分析試料は、御土居堀跡の埋土の9層と10層の2点である。

2. 分析方法

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプレウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985～1991)、Desikachary(1987)などを参考にした。

3. 結果の表示方法

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表内に示す。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、基本的に1%以上(検出種数により変更)の出現率を示す分類群についてのみ表示した(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。表示する分類群は、分析試料全体で産出率の合計が1%以上の分類群である。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。

4. 結果

結果は、表1、図1に示す。

珪藻分析を行った2試料からはいずれも100個体以上検出した。

珪藻化石が比較的多く検出された試料の淡水生の群集の特徴については、生態性（珪藻の3つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性）について整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。

まず、塩分に対する適応性は、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれたほうがよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いあるいは低いといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域であることが多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

結果としては、貧塩—不定性種が優占しており、全体の65～67%を占めている。貧塩—好塩性種は、12～15%程度である。

次にpHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

結果としては、好+真アルカリ性種が優占し、約50%程度を占めている。好酸性種は、5%程度と低率である。

流水に対する適応性は、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時流のあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定性は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

結果としては、流水不定性種が優占し、全体の約55%を占めている。他は、好+真流水性種が20%程度認められる以外、好+真止水性種は約5%の産出率を示す。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

水生珪藻と陸生珪藻の比率は、本試料では水生珪藻が優占し、80%以上を占めており、陸生珪藻は15～20%である。

特徴的に見られた種は、*Melosira varians*、*Planothidium lanceolatum*、*Gomphonema parvulum*、*Lemnicola hungarica*、*Hantzschia amphioxys*、*Nitzschia palea* である。

5. 考察

今回分析した2試料で産出した種はいずれも同様の傾向を示した。

特徴的に見られた種は、淡水生種で流水性種の *Melosira varians*、*Planothidium lanceolatum*、流水不定性種の *Gomphonema parvulum*、*Lemnicola hungarica*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* である。少数ではあるが特徴的な種として、*Nitzschia palea* が産出した。

上記の特徴種の生態性または生育環境について述べると、流水性種の *Melosira varians* は、河川等の

流水域に生育する種であり、中～下流河川指標種群と呼ばれる(安藤 1990)。中～下流河川指標種群は、河川の中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘、扇状地、自然堤防および後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現し、他の地域には出現しなかったり、出現しても主要でないことから、この地域を指標する可能性が大きい種群とされる。

淡水生種で流水性種の *Planothidium lanceolatum* は、安藤(1990)によれば、河川の中～下流部、すなわち、河川沿いに河成段丘、扇状地、自然堤防および後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現し、他の地域には出現しなかったり、出現しても主要でないことから、この地域を指標する可能性が大きい種群とされ、中～下流河川指標種群とされている。

流水不定性種の *Gomphonema parvulum* は、流水に対して不定だけでなく、塩分濃度や pH に対しても不定であり、極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe(1995)は、広域適応種としている。ただし、経験的には、流水域に多産することが多いことから、以前は流水性種に含まれていた種である。

流水不定性種の *Lemnicola hungarica* は、付着性で池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的であるが、中汚濁耐性種(小林ほか 2006)とされ、水田からも特徴的に出現する(田中 2002)。

Hantzschia amphioxys 等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉 1986)であり、特に離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる種群とされる(伊藤・堀内 1989;1991)。

淡水～汽水生種とした *Nitzschia palea* は、好汚濁性種(Asai & Watanabe 1995)とされ、水中の塩類濃度が高まった後背湿地や特に人為的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。

産出した優占した種あるいは特徴的な種と産出した群集を考慮して堆積時の環境を推定する。

陸生珪藻が 20% 近く産出していることや珪藻殻の保存状態が不良である事から基本的に好気的な環境であったと推定できる。20% 近く産出している流水性種は御土居堀跡内に水が流入した際に一緒に流入したと考えられる

また、*Nitzschia palea* や *Lemnicola hungarica* 等の汚濁性種が産出している事から、御土居堀跡内は、閉鎖的な水域となっており、周囲から多くの栄養塩が多く流入していたと考えられる。

以上の分析結果から、分析地点近傍の遺構内の水深は、かなり浅く、乾燥することも多かったと考えられる。このようことから、分析地点近傍では、安定した水深のある滞水域が存在していなかったと判断される。この点は、止水生種がほとんど産出しないことからもうかがえる。また、遺構に存在した水には、汚濁物質が流入しており、汚染が進んでいたことが推定される。

引用文献

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42(1990), 73 ~ 88, aNN. Tohoku Geogr. Assoc.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35 - 47.

H

Desikachari, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras. Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044.

1-13, Plates : 401-621.

Horst Lange-Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs. 925 pgs.

Husteded, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Husteded, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Husteded, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Husteded, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz. 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 ——陸生珪藻の細分——. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1,

小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑, 第1巻, 堀内田老鶴園, 531p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1) : 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

表1. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	分析試料	
	塩分	pH	流水		9層	10層
<i>Bacillaria paradoxa</i> Grunow	Ogh-Moh	a1-b1	1-ph	U	-	1
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Moh	a1-11	1-ph	S, S	-	1
<i>Vitzschia palis</i> (Grunow) K. Smith	Ogh-Moh	ind	ind	U	5	2
<i>Achnanthes japonica</i> H. Kobayashi	Ogh-ind	a1-11	r-bi	J, T	1	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-
<i>Amphora montana</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	RA	8	3
<i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	a1-11	ind	T	4	2
<i>Amphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	1-ph	U	-	2
<i>Galeosira bacillifera</i> (Grunow) Cleve	Ogh-ind	a1-11	r-ph	U	2	-
<i>Galeosira melaria</i> (Grunow) K. Smith	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1
<i>Cocconeis planicosta</i> var. <i>ovulifera</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	a1-11	r-ph	T	1	-
<i>Cyclotella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-
<i>Orbelliella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	a1-11	r-ph	K, T	1	-
<i>Orbelliella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3
<i>Eucoscinus silustaceus</i> (Hilse) (in Rebenh.) D. G. Mun	Ogh-ind	ind	ind	T	-	3
<i>Enantia implicata</i> (Noepel) Lange-Bertalot	Ogh-bak	ac-11	ind	O	1	1
<i>Fragilaria capucina</i> (Desmarest) Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	T	6	2
<i>Fragilaria alata</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	a1-11	ind	O, U	8	6
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	7
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	11	15
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	4
<i>Baustschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	RA, U	15	28
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grunow) Round & Russo	Ogh-ind	a1-11	ind	U	5	14
<i>Laticula matica</i> (Kuetz.) D. G. Mun	Ogh-ind	a1-11	ind	RA, S	-	2
<i>Melobesia varians</i> C. Agardh	Ogh-bil	a1-b1	r-ph	K, U	20	27
<i>Navicula capitatoradix</i> Grunow	Ogh-ind	a1-11	r-ph	K, T	1	-
<i>Navicula clementis</i> Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	U	2	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	RA, T	1	1
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	a1-11	ind	U	10	6
<i>Navicula cryptosphaera</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	4	4
<i>Navicula stellata</i> Kuetzing	Ogh-ind	a1-11	ind	T	2	1
<i>Navicula placenta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	a1-11	ind	RT	-	1
<i>Navicula pseudohyalis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	a1-11	ind	O, U	-	2
<i>Navicula pseudohyalis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	O, U	-	1
<i>Navicula subovalis</i> Hustedt	Ogh-bak	a1-11	ind	O, U	1	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	a1-11	ind	O, U	2	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2
<i>Nelidium alpina</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	2	-
<i>Nelidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	a1-b1	ind	S	-	1
<i>Nitzschia brevenia</i> Hustedt	Ogh-ind	a1-11	unk	O, U	2	-
<i>Nitzschia brevisaxia</i> Grunow	Ogh-ind	a1-11	ind	RR, U	4	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	2
<i>Pinnularia scoparia</i> W. Smith	Ogh-ind	a1-11	1-ph	N, O, U	4	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	3
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	1-ph	O	-	2
<i>Pinnularia micrasteria</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-11	ind	S	3	6
<i>Pinnularia nobilii</i> Ehrenberg	Ogh-bak	ac-11	1-ph	RA	-	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-11	ind	RR, S	3	5
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	2
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		9	8
<i>Placosticta stigmatis</i> (Grunow) Co	Ogh-ind	a1-11	ind	O, U	2	2
<i>Planchidium lanceolatum</i> (Ehr.) ex Kuetz. Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	17	7
<i>Selaphera papula</i> (Kuetz.) Mereschkowicz	Ogh-ind	ind	ind	S, U	-	3
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	1-ph	ind	3	5
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>zigzag</i> Meliszer	Ogh-ind	ind	1-ph	N, O, U	2	3
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	6
<i>Sarrillella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	a1-11	r-bi	U	-	3
<i>Sarrillella minut</i> Brevisson	Ogh-ind	a1-11	r-ph	U	3	2
<i>Sarrillella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	6
淡水生種					0	0
汽水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
汽水～汽水生種					5	5
汽水生種					203	204
珪藻化石記録					208	209

凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

R.K.:塩分濃度に対する適応性

Euh.:海水生種

Euh-Moh:海水生種・汽水生種

Moh.:汽水生種

Ogh-bil:採取好適性種

Ogh-ind:採取不定性種

Ogh-bak:採取困難性種

Ogh-unk:採取不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性

a1-b1:狭7.45性種

a1-11:好7.45性種

ind:広pH不定性種

ac-11:好酸性種

ac-b1:好酸性種

unk:pH不明種

C.S.:流水に対する適応性

1-b1:真流水性種

1-ph:好流水性種

ind:流水不定性種

r-ph:好流水性種

r-bi:真流水性種

U:流水不明種

環境指標種

A:外洋指標種 B:内洋指標種 C1:海水藻類指標種 C2:汽水藻類指標種

D1:海水砂質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種

E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種 F:淡水底生種群 (以上は小杉, 1968)

G:淡水浮遊性種群 H:河口浮遊性種群 J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種

L:低下流性河川指標種 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沼沢地指標種 O:沼沢地陸付着生種

P:高層草原指標種 Q:陸域指標種 (以上は文部, 1990)

S:好汚濁性種 T:好清水性種 U:広適応性種 (以上はAnai, K. & Watanabe, T. 1995)

R:陸生珪藻 (RA:群, RB:群, 伊藤・堀内, 1991)

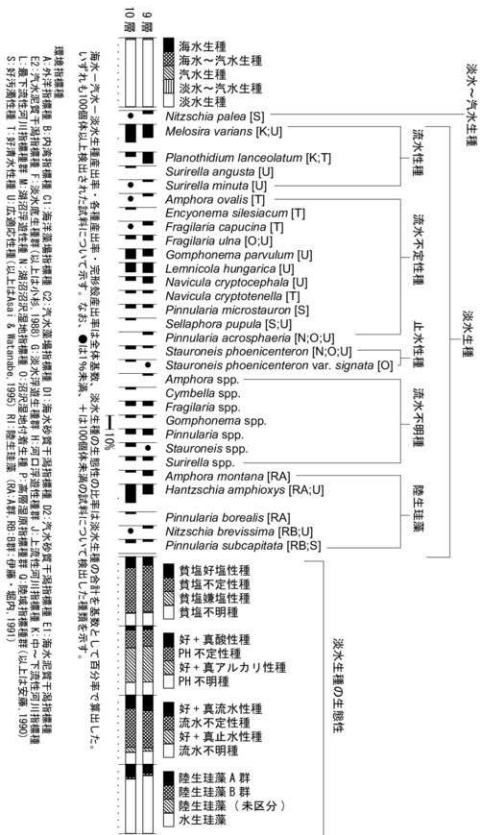
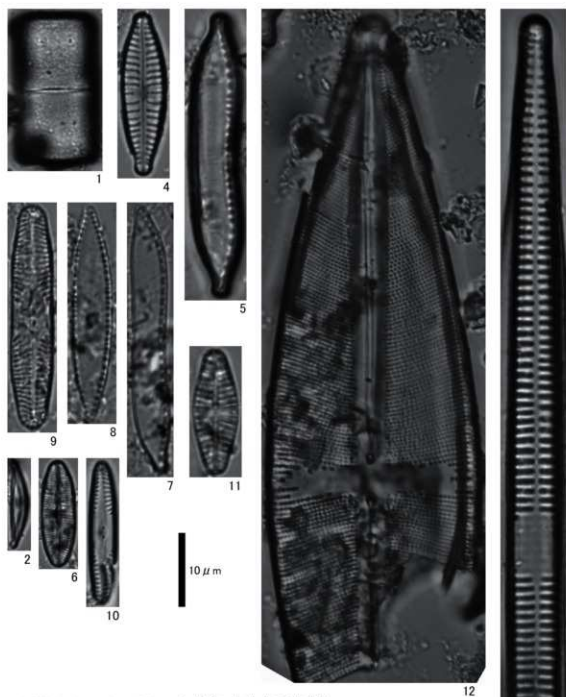


図 1. 珪藻分析結果

図版I 珪藻化石



- 1 *Melosira varians* C.Agardh (ブロック中央部分9層)
- 2 *Amphora montana* Krasske (ブロック中央部分9層)
- 3 *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (ブロック中央部分10層)
- 4 *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (ブロック中央部分9層)
- 5 *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (ブロック中央部分9層)
- 6 *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson (ブロック中央部分9層)
- 7 *Nitzschia brevissima* Grunow (ブロック中央部分9層)
- 8 *Nitzschia palea* (Kuetz.) W.Smith (ブロック中央部分10層)
- 9 *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (ブロック中央部分9層)
- 10 *Pinnularia subcapitata* Gregory (ブロック中央部分9層)
- 11 *Planolithidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot (ブロック中央部分10層)
- 12 *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister (ブロック中央部分9層)

表2 遺物観察表

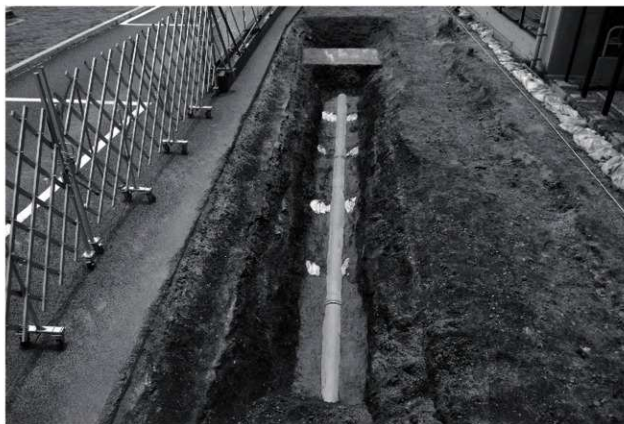
※法量のカッコ内は口径・底径は現元、器高は残存

調査番号	出土遺構	種類 器種	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	胎土	焼成	時期
図19-1	Ⅰブロック 近代遺土	常滑焼壺	—	—	—	回転ナデ	内面10YR3/2黒褐色 外面7.5YR3/2黒褐色	灰	堅焼	中世
図20-2	Ⅱブロック 濃民遺構1	染付陶鉢	—	—	—	凡磁胎	内外面ともに2.5GYR/1灰白色	灰	堅焼	肥前系 18世紀後半
図20-3	Ⅱブロック 濃民遺構1	染付壺	—	—	—	凡磁胎 雲紋	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	瀬戸美濃系 明治
図20-4	Ⅱブロック 東照院跡	染付陶	—	—	—	細網印刷	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	肥前系 明治
図20-5	Ⅱブロック 東照院跡	染付陶	11.2cm	4.9cm	3.8cm	墨文	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	瀬戸美濃系 明治
図20-6	Ⅱブロック 東照院跡	染付壺	10.0cm	11.2cm	—	凡磁胎	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	瀬戸美濃系 明治
図20-7	Ⅱブロック 西照院跡	染付陶	—	12.0cm	3.0cm	墨文	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	瀬戸美濃系 明治
図20-8	Ⅱブロック 西照院跡	染付陶	—	12.9cm	3.4cm	墨文 肥前外面に基	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	明治
図21-9	Ⅲブロック 6層	軒瓦瓦	長10.4cm	幅14.0cm	—	内面ナデ調整	内外面ともにN2/黒色	灰	堅焼	近世
図22-10	Ⅳブロック 近代遺土	陶笛 笛形	—	13.6cm	10.6cm	回転ナデ 外面施釉	内外面ともに5Yオリーブ黒色	灰	堅焼	基本→明治
図22-11	Ⅳブロック 近代遺土	陶笛 土瓶	7.6cm	13.8cm	—	回転ナデ 外面施釉	内外面ともにN8/黒色	灰	堅焼	明治
図22-12	Ⅳブロック 濃瓦	土師質土瓶 大瓶	—	13.6cm	—	外面ヘアミダキ	内面7.5YR5/4にぶい褐色 外面7.5YR6/4にぶい褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-13	Ⅳブロック 濃瓦	土師質土瓶 大瓶	19.6cm	19.3cm	—	回転ナデ	内外面ともに10YR6/2黒褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-14	Ⅳブロック 濃瓦	土師質土瓶 大瓶	21.2cm	110.0cm	—	回転ナデ	内外面ともに7.5YR6/4にぶい褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-15	Ⅳブロック 濃瓦	土師質土瓶 中	21.2cm	7.0cm	—	外面ヘアミダキ	内外面ともに7.5YR6/8褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-16	Ⅳブロック 濃瓦	土師質土瓶 中	20.0cm	13.0cm	—	外面ヘアミダキ	内外面ともに7.5YR6/8褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-17	Ⅳブロック 濃瓦	陶笛 土瓶	8.6cm	7.5cm	7.2cm	回転ナデ 外面施釉	内面10YR6/4にぶい濃褐色 外面10YR7/3にぶい濃褐色	灰	堅焼	明治
図22-18	Ⅳブロック 濃瓦	陶笛 笛形	—	16.4cm	8.2cm	回転ナデ 外面施釉	内面10YR2/3黒褐色 外面10YR2/2黒褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-19	Ⅳブロック 濃瓦	陶笛 笛形	—	17.2cm	10.0cm	回転ナデ 外面施釉	内面10YR2/3黒褐色 外面10YR2/2黒褐色	灰	堅焼	基本→明治
図22-20	Ⅳブロック 濃瓦	染付陶	—	12.5cm	4.8cm	墨文か	内外面ともにN8/灰白色	灰	堅焼	18世紀前半
図22-21	Ⅳブロック 濃瓦	染付陶	—	12.9cm	—	凡磁胎	内外面ともに2.5GYR/1灰白色	灰	堅焼	肥前系 18世紀前半

圖 版



1 ①ブロック南半全景（北から）



2 ①ブロック北半全景（北から）



1 ③ブロック北半全景（北から）



2 ③ブロック南半全景（北から）



1 ①ブロック南壁断割土層断面（西から）



2 ③ブロック北壁断割土層断面（南から）



1 ②ブロック南半完掘状況（北から）



2 ②ブロック北半完掘状況（北から）



1 ④ブロック北半全景（北から）



2 ④ブロック南半全景（北から）



1 ④ブロック中央北側断割土層断面（西から）



2 ④ブロック中央南側断割土層断面（北から）



1

①ブロック近代盛土出土土器 (1)



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

④ブロック攪乱出土土器 (10～19)



9 凸面



9 凹面

③ブロック近代盛土出土土瓦 (9)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょういちぼういちちょう跡とおどいふとまいぞうふんかざいほくつちょうさほうこくしょ
書名	平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	河野凡洋・長林 大・千喜良淳
編集機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行機関	国際文化財株式会社
所在地	大阪市中央区南船場2-3-2 南船場ハートビル 8F
発行年月日	西暦2016(平成28)年11月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京 さきょうはちじょういち 左京八条一 ぼういちちょう跡 おどいふと ・御土居跡	きょうとし 京都市 しんぎょうく 下京区 かきぎじょう 観喜寺町 うち 地内	26106	1 149	34° 59' 47"	135° 44' 35"	2016年 6月29日～ 2016年 9月1日	376.24	新駅新設工事に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡	都城跡 土塁跡	江戸時代末～ 明治時代	堀跡、流路状遺構	土師質土器、陶磁器、瓦器、瓦	
要約	御土居(堀)跡の西肩を検出。最終的に埋没した時期は江戸時代末から明治初期頃と考えられる。近世以前の遺構は検出できなかった。				

平安京左京八条一坊一町跡・

御土居跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2016 (平成 28) 年 11 月 30 日

編集・発行 / 国際文化財株式会社

〒 660-0805 尼崎市西長洲町 1 丁目 1 番 15 号

TEL : 06-4868-5980 FAX : 06-4868-5981

印刷 / 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
TEL075-256-0961